運営費助成事業完了報告書

日本財団　会長　笹川　陽平　殿

報告日付：2020年5月15日
事業ID：2018484995
事業名：沖縄県うるま市における
第三の居場所（A）の運営
団体名：一般社団法人りあん
代表者名：山城　康代　　印
TEL：098-972-6200
事業完了日：2020年3月31日

事業費総額	18,969,250円	収支計算書の黄のセルの値
自己負担額	250円	収支計算書の緑のセルの値
助成金額	18,969,000円	収支計算書の赤のセルの値。千円未満は切捨
助成金返還見込額	3,021,000円	（収支計算書の青のセルの値）

1.事業内容（実績。700文字以内）：
１、対象児童のアウトリーチ
第三の居場所として、生活困窮世帯やひとり親家庭の子どもたちを居場所につないだ
2019年8月までに15名を目標としていたが、2020年３月現在１０名である。
２、家庭の支援
家庭訪問や面接を通して、家庭と行政・学校と連携した支援を行った。
面接は定期的な面接以外に保護者からの要望でも面接を行い、日報に記録を取って職員で内容を把握しながら児童への対応を行った。

３、地域交流会　3回開催
チャレンジ館祭りやにこキッズフェスタへの参加。秋祭りは来場者134名で地域の方や学校関係者・行政関係者を招待し、自家製ピザ窯で作ったピザや冷たい飲み物を提供した。またゲームやかき氷を提供し、多くの来場者に楽しんでもらう機会を提供した。

４、子どもの体験活動　年5回
野菜の植付体験や沖縄の行事食つくりなど、自然体験活動や科学に関心をもってもらうための体験活動を行った。また、迷路つくりでは設計図から児童がつくり、落とし穴や細かな道をつくって仕上げた。手作り凧作成では好きな絵を描き、竹ひごを加えて凧を作りその後小学校のグラウンドで凧揚げを楽しんだ。アーティストを招いて本格的な画材でライオンの絵を仕上げてた。
５、仲間とのふれあい　12回
鯉のぼりを作ったり、コンサートの出演したり、毎月公園やイベント等に子ども達全員で参加し、遊びを通した仲間つくりを大切にした。
・運動公園でサイクリング・レジャープール・東南植物楽園・平和記念公園・てぃーだフェス・伊波公園児童センター祭り・冬まつり・世界のウチナーンチュとダンス・ハートフルコンサート・アート等

2.事業内容詳細：
・児童集めについて対象校や行政、社会福祉協議会、民生委員、各行政区長、幼稚園、保育所等から生活困窮世帯の情報を得て当施設（居場所）につながる為のアウトリーチを行ったが、個人情報の提供は難しいとのことで、保育所のみ紹介を受けることができた。
・家庭訪問を行うことは難しかったため、面談で保護者の要望を確認し、困りごとの相談を受けた。児童の学習の進み具合や、体調面、身なりを整えることについて保護者の負担に感じている点や、行政とのつながりについて話を行い、日報に記録として残している。
・地域交流によって近隣の方に顔を覚えてもらい、声をかけてもらう頻度が高くなっている。利用児童が危険行為を行った際には職員に教えてくれる方もおり、安全面でも役立っている。
・体験活動では自分が興味を持っている分野以外でも「やってみると意外に楽しい」ということに気づき、お手伝いの幅が広がってきた児童もいる。活動するたびに「将来は〇〇になる！」となりたいものがよく変わるが、興味の幅が広がっており、行動力も少しずつ上がってきている。
・仲間とのふれあい体験を頻繁に行い、遊びを重ねることで体力がつき、創作活動も増えて意欲的な行動を起こすようになってきている。

3.契約時事業目標の達成状況：
【契約書記載の目標】
１．拠点利用児童の募集（申請時点で7名が登録中、2020年度3月末までに15名の利用を目標とする）
・対象校や社会福祉協議会、行政と連携して対象児童を募集する。
２．利用児童への居場所、読み聞かせ、学習支援及び食事などの提供
・児童が落ち着ける場所としての機能を果たし、絵本に親しむ工夫や、学習習慣、食事のマナーを身につけるよう支援を行う。
３、利用児童保護者との関係構築とニーズに応じた生活支援の提供
・保護者が相談しやすい環境を整え、対象家庭の生活向上に向けた支援や必要な繋がり先を提供。状況に応じて同行して支援を行うことも視野に入れる。
４、対象校との連携強化と児童及び家庭に関する情報共有
・担任教諭との関係を強め、児童の家庭状況を共通理解することによって適切な支援を行う。
５、自己肯定感を養うためのライフスキルプログラム等の実施
・自他共に大切な存在であることや、尊重されるのは当然の権利であること。お互いが違うことを認め合えるように理解し、「成し遂げられる自分」を体験させる。
６、地域交流会を年3回実施
・大きなイベントや小規模のイベント、参加型のイベントなどで仲間と楽しい時間を共有し、相手に存在を認めてもらい達成感を味わう。
・保護者全員と地域来場者で50名規模のイベントを目指す。
７、拠点利用児童と月1回イベントを開催
・地域の児童館によるイベントや公園などで遊びを楽しむ。運動公園やレジャー施設で、利用児童の家庭では体験することができない広い場所でのサイクリングや大型遊具、アスレチック、レジャープールなどの課外活動を行う。

【目標の達成状況】
１の達成状況：2020 年 3 月末時点での登録が 10 名。目標とする 15 名には届かなかった。対象校や幼稚園、近隣の保育所の訪問を行い、社会福祉協議会や民生委員、市役所等の行政にも働きかけていたが個人情報の取扱いに慎重さがあり、紹介に至らなかったケースが多かった。

２の達成状況：学校終了後にすぐに登所し、タイムスケジュールに沿って遊びや勉強、おやつなど、時

間管理を自分で行うようになってきている。夕食終了後、保護者からのお迎えを待ちながら職員による読み聞かせや児童の絵本タイム、自分が面白いと思った本の紹介や、次はどんな本を買って欲しいなどの要望も話してくれるようになった。学習は苦手分野を個々の児童ごとにフォローすることができている。教科書を読めなかった児童は文字のフォントを変えることで読めるようになり、現在では教科書を初見で読めるようになっている。

3の達成状況：玄関先に前月参加したイベントの写真を貼り、児童の様子を職員が何度も繰り返し紹介することによって、あまり関心を寄せなかった保護者が話に加わるようになってきた。お弁当を準備することもままならなかった保護者が児童の好きなキャラ弁を作り、その写真を当施設の LINE に送ってくれるようにもなっている。子どもの希望を叶えるためにと職員に相談を持ち掛ける保護者もおり、保護者からの信頼も得られるようになった。

4の達成状況：個人情報保護により連携に難色を示していたが、秋祭りイベントに招待した際、児童と一緒に楽しんでくれた担任教諭が当施設の取組みを知り理解を深めてくれた。イベント以降は当施設からの働きかけだけでなく、担任教諭からの問い合わせや連絡などもあり、少しずつではあるが信頼を得られるようになったと感じている。

5の達成状況：当施設の児童らは自分の気持ちを相手に正しく伝えられないことが多く、表出に困難さがある。痛みがあっても泣くことができず、笑ってごまかしたり、黙って隠したりする児童や、攻撃的な態度を繰り返す児童もいる。感情の希薄さや沸点の低さという両極端な表現を適切な行動に移行させるため、「自分と相手は違う存在であること」や「時間がかかっても諦める必要はないこと」、「『できた！』という体験」を何度も繰り返し行うことによって少しずつだが言葉や態度に変化が出てきている。そのための活動として菓子作り体験、茶碗の絵づけ体験、ろくろ教室、工作（凧作り、迷路作り、ビーズ教室、新聞紙で作るテント作りなど、当日で完成できる体験教室）、アート教室（アーティストを講師として絵画で使用する本格的な道具を使わせてもらい作品を完成させた）など、自分の手で創り上げ、自分だけの作品を完成させ、それをみんなの前で発表し、保護者にも見てもらい、声をかけてもらうことで言葉と態度に変化がみられるようになった。

6の達成状況：「秋祭り bg カフェ」を平日と土曜日の 2 日間開催。2 日間の来場者総計は 134 名。近隣の中学校や児童館と行事が重なり、来場者が少なくなるかと心配したが、児童の担任教諭や幼稚園の先生方、地域の方々など、多くの来場者でにぎわいをみせた。他、「チャレンジ館祭り&ハロウィンパレード」、「にこキッズフェスタ」、「世界のウチナーンチュとダンスを踊ろう！ 」などに参加し、児童と職員は本番に向けたダンス練習を行い、舞台に立つことができた。

7の達成状況： 季節の野菜作りや行事食を作るイベント、干支の置物作り、慰霊の日に向けた読み聞かせや新聞の切り抜き発表などの他に、県総合運動公園や東南植物楽園でのサイクリング体験や大型プール、大型遊具、食虫植物の講座参加など、今まで行ったことのないイベントを開催することができ、児童らはとても喜んでいた。

4.事業実施によって得られた成果：
1の成果：児童集めについては対象校や社会福祉協議会、行政からの児童のつながりはなく、保育園による紹介だけであった。現在、対象校との関係性が良好になってきており、教頭先生や担当教諭から紹介できる児童の詳細問い合わせもあることから、2020年8月までに15名の利用を目標とする。

2の成果：児童が困ったことや要望を職員に相談できるようになり、読み聞かせの習慣もついてきた。発達障害などの特性により机に向かう時間に限りがある児童もいるが、ほとんどの児童は自覚をもって学習に取り組めている。食事に関しては嫌いなものでもみんなと食事をすることで好き嫌いの幅が減り、外食の際のマナーを守ることができるようになっている。

3の成果：お迎え時に行う（保護者への）引継ぎやLINE等で保護者との連絡は密に行っている。特にLINEでのやり取りは保護者も応じやすく、お迎え時間の連絡や疑問点などを気軽に確認できると好評である。また、児童が楽しく活動している写真を送ると喜ばれ、当施設と保護者が行うLINEが親子の会話にも役立っているとのこと。様々なツールを利用して、オンラインだけでなく面接などのスケジュールもたてて関係性を強めて行く予定である。

4の成果：秋祭りイベント後の関係性が良くなり、連携がうまくいきはじめている。来年度は教頭先生が継続されることもあり、交流をそのまま保ちながら連携し情報共有することを確認しあっている。

5の成果：工作やお菓子作りなどで「できた体験」を何度も重ね、児童らに達成感を得てもらった。糸満に工房を持つ陶芸家が来所し、ろくろや絵づけ体験を行ないながら自分のお茶碗を創り、絵画本を紹介し、その著者を招いて本物の画材を使用して絵を描き上げる体験などを行った。児童らはそのことでプロの指導を受けながら自分にしかできない作品を手にし、自信につながっていった。

6の成果：保護者や担任教諭を招いて児童自ら当施設の紹介やピザと飲み物でおもてなしを行うなど、日々の活動をみてもらい、声をかけてもらうことで保護者と教諭、地域の方々の見守りの目に変化が出た。イベント前よりも児童や職員に対する声掛けが多くなり、温かく接してくれるようになった。

7の成果：今まで経験できなかった広い場所でのサイクリングや大型遊具、大型プールなど、思いっきり体を使った体験や、野菜の植え付けやいちご狩りなど、季節を感じる活動で自然を感じる体験も行うことができた。

5.成功したこととその要因：
1の成功要因：今年度は保育園からの紹介のみで募集が思うようにはいかなかった。

2の成功要因：スタッフが児童の特性をとらえ、話を聴くタイミングや絵本選び、学習の躓きなどを察知することができた。食事も楽しい時間となるようにキャラクターを模して苦手な食材を食べられるような工夫を行った。

3の要因：児童のいい面をとらえ、報告し、困りごとがないかとの声かけやお迎え時の雑談に応じるなどで様々な話をしてくれるようになった。LINEをツールとして活用したことでより身近に感じてくれるようになっている。

4の成功要因：秋祭りイベントで当施設の活動を理解してもらったことで信頼を得た。児童らの生き生きと活動する様や担任教諭が来所した際に児童が喜び、おもてなしをする様子をみてくれたのが大きな要因となっている。

5の成功要因：日頃から物作りを行えるように工作グッズをそろえ、ちょっとした時間でも職員が児童の物作りに対応することで小さな達成感を積み重ねていく環境ができている。出来上がった作品を飾って

あげることで大事にされているように感じ、相手の作品も褒めることができるようになってきた。また、職員が児童の話に対して時間をかけて聴いてあげることで自分のことを少しずつ話せるようになってきた児童もいる。

6の成功要因：学校のニーズ（どのような時期に対象校の先生方が来所しやすいか）を確認し、ボランティアも社会福祉協議会に依頼し募集した。地域の中学生にも児童と一緒に活動してもらえるように依頼し、職員の役割分担と児童の役割配置を行うことでイベントをスムーズに進めることができた。

7の成功要因：児童らのやりたいことを職員が把握し、そのニーズに沿ってイベントを決定したことで児童自ら積極的に楽しく活動することができた。

6.失敗したこととその要因：
1の失敗要因：当施設が児童にもたらしているいい影響や実際の姿をみてもらう工夫を行わないままに対象校の先生方や行政など、関わる方々に児童募集だけを前面に出していたためではないかと考える。

2の失敗要因：学習拒否の児童に対して無理じいすることはできない為、課題を容易なもの（絵本読みなど）に変えても良しとしている。しかし、その対応で他児によっては不満が募り、場の空気が悪化することがしばしばあり、利用児童全員への周知を行い、全員が納得する状態で学習の時間を過ごす必要性を感じた。

3の失敗要因：保護者によっては意見が二転三転することがあり、職員の情報共有不足で保護者に疑念を抱かせることがあった。毎日記載する日報にきちんと目を通さずに職務に入ると情報不足のままに業務に就き、トラブルとなるため日報確認は必須である。

4の失敗要因：対象校側のニーズや日頃からの交流で信頼を得る前に当施設の要望を出してしまったために連携や情報共有が滞ってしまった。

5の失敗要因：工作を常に行っているが品ぞろえに限界があり、児童の要望に応えられないことが多くなってきた。職員の自宅から段ボールや新聞を集めて作品作りを行うが、児童の消耗品の利用頻度が激しく、消耗品の調達と後片付けに苦慮することが多くあった。

6の失敗要因：来場者数の予測をきちんと行っていなかったために、人員配置が上手くいかず、ピザや飲み物の配膳が滞った時間帯があり、児童らの動きも止まってしまうことがあった。

7の失敗要因：児童の要望に沿って行先などを決定していたが、スケジュール決定は職員で行っていたため、児童らの依頼心が高くなっていたように感じる。

7.活動を通じて明らかになった新たな課題と対応案：
・児童同士のトラブルに対して一部の職員に任せて対応を終了することがある。対応終了後には原因と対応を全員で確認し、次回も同様のトラブルがあった際には対処しやすいように行動する。
・情報共有不足により保護者に疑念を抱かせ、トラブルが発生することがある。ミーティングや日報の申し送り確認ができていないために発生。保護者対応の際には複数の職員で話を聴くようにし、ミーティン

グや申し送りで情報共有し、一貫した対応を行う必要がある。ミーティングは児童が登所する前に毎日行うことを原則とし、できない場合には曜日と時間を決めて職員が必ず確認するボード（キッチン）に記載し確認しあう。日報は就業前に必ず目を通すことを日課とする。
・保護者によって伝わり方が違うこともあり、お互いの困りごとを早めに解消できるよう、年度初めにオリエンテーションを行い、保護者への一方的な伝え方ではなく、双方向から相談しあえるような分かりやすいルールを設ける予定。
・イベントや日頃の活動は職員が主となり計画しているため、児童からの要望はあるが、「企画をしたい」との声が出ていない。自主性に欠ける部分がみられる。次年度からは児童自らの企画でイベントを行い、自分の行動で周囲にどれだけの影響を与えられるかを実感してもらう工夫を行う。
・学校側との連携については今年度のイベントに変化を加えて、当施設にあるピザ窯で対象校側と小規模体験などの企画を考え、交流を図る予定。幼稚園とは3月後半にピザ窯交流を行う予定であったが、新型コロナウイルスの影響で中止となってしまった。しかし、予定していた日は当施設で焼いたピザや焼き芋を対象校と幼稚園に（利用児童と一緒に）配達し、喜んでもらった。交流の基礎はできており、来年度はさらに交流を深めて行く予定である。
・食事の提供が安定的になると、“遊び”をはじめる児童がおり、他児もそれに引きずられる傾向がみられている。食べることの大切さとマナーを守ることの重要性を感じてもらうために食事提供の他に自分で調理ができるよう、児童主催の食事会などを開催し、自立に向けた料理教室などを行う予定。当施設卒業後のことも見据え、食事の大切さを学ぶ機会にする。

事業成果物及びURL：http://nippon.zaidan.info/jigyo/2019/0000093836/jigyo_info.html
【成果物の名称】
沖縄県うるま市における第三の居場所（A）の運営　2019 年助成事業
【助成機関】
機関名：公益財団法人日本財団
【URL】：https://www.nippon-foundation.or.jp/